当館の教育活動　和本ハンズオン体験で学ぶ江戸時代と明治維新

玉川学園は幼稚部から大学まである総合学園です。そのため大学附置機関である当館も現場の教員と協力しながら、小学生や中学生を対象にした様々な教育活動を行っています。今回はこうした博物館教育プログラムの一つである「和本ハンズオン体験で学ぶ江戸時代と明治維新」を紹介致します。

当館では、例年秋に小学6年生を対象にした杉田玄白『解体新書』のハンズオン体験が行われていました。これは小学6年「社会」の授業の「江戸時代の文化」の単元にあわせた活動で、展示見学や杉田玄白『解体新書』のハンズオン体験を通して江戸時代の学問や文化を学ぶ教育プログラムです。

しかしながら、今年は趣向を変えて博物館スタッフが小学6年生の教室に出張して「出前授業」を行いました。また、現場の教員と相談して、『解体新書』ばかりでなく、明治維新の頃の修身や歴史の教科書のハンズオン体験も行って、児童の歴史に対する興味を高める試みを致しました。実物の資料に触れる体験は児童たちにとって、とても新鮮な体験であったようで、真剣に授業に取り組んでいました。

明治の教科書を手にしての学習

もちろん、このプログラムはハンズオン体験だけで終わりというものではなく、児童は配布されたワークシートにこの授業を通して感じたことや考えたことをまとめ、本当の意味で「学習する」ことの楽しさや喜びをつかんでいきます。

（宇野慶）

質問です

Q. 展覧会の期間や時期は、どのように決めるのですか？

A. 一般論としてお答えします。展覧会等の行事計画は、前年度に博物館内や関係機関でよく相談して決定し、年度初めに公表するのが普通です。展覧会を企画する学芸員としては、沢山の方に見てもらえるよう、できれば会期を長くしたいと思っています。一方、長期の展示は貴重な資料を傷めることにもつながります。そのため褪色しやすい重要文化財などは、年間公開日数が30日以内に制限されています。資料を将来の人たちにも同じような状態で見てもらうために、資料が受けるダメージについても考慮し、会期を決めなければなりません。また、外部から資料を借用して展示する場合、予め期間を決めてお借りしますから、急な変更は難しいですし、仮にその期間を延ばせても、借用料や損害保険料の負担も増えることでしょう。さらに同じ会場ですぐ次の展覧会の予定が入っている場合、それを楽しみにしているお客様もいますので、開催中の展覧会が好評でも、実際にはおいそれと会期延長はできないのです。

展覧会を開催する時期は、資料を移動させる上で温度や湿度など、空気の状態による負担が少なく、お客様も出かけやすい季節として、暖かい春と爽やかな秋が適してします。この時期に準備や予算的な面で力を入れた、年間の目玉となる展覧会を開催する博物館が多いようです。

（菅野和郎）